岩手県胆江地方および和歌山県
農村ワーキングホリデーを活用した都市農村交流の「鏡効果」と農村再生手法としての可能性の検証

【地域の基礎データ】

人　　口：	約 14 万人（胆江地方） 16,926 人（かつらぎ町/平成 31 年 1 月末現在）
面　　積：	1173.06 平方キロメートル（胆江地方） 151.69 平方キロメートル（かつらぎ町）
高齢化率：	31.9%（胆江地方/平成 27 年 1 月 1 日現在） 35.2%（かつらぎ町/平成 27 年 1 月 1 日現在）
産　　業：	農業（稲作、畜産）　など（胆江地方） 農業、製造業　など（かつらぎ町）
観光資源：	えさし藤原の郷、温泉　など（胆江地方） 丹生都比売神社、串柿の里　など（かつらぎ町）

【活動の基本情報】

参加学生数：32 名（1 回生：8 名、2 回生：10 名、3 回生：10 名、4 回生：4 名）

活 動 期 間：平成 26 年 6 月～

担 当 教 員：藤田武弘

1. 活動実施の経緯

戦後高度経済成長の過程で，農村では若年労働力が都市に流出する「人」の空洞化と併せて条件不利な農林地が荒廃化するなど「土地」の空洞化も拡がった。その後，都市と農村との格差は一段と拡がり，農村での相互扶助的な集落機能（「むら」）の空洞化も進んだ。さらに，経済効率や合理性のみを追求する考え方が横行したことで，農業で生計を立てることに対する農家の「誇り」も奪い去られた。しかし、近年になって、安全・安心な食やその土台をなす国内の農業・農村に関心を寄せる都市住民が増え始めている。

「農村ワーキングホリデー」は、農業や農村に関心をもつ都市住民が、繁忙期の農作業を無償で手伝う代わりに農家から寝食の提供を受けるというもので、参加者と農家との深い交流を特徴とする“日本型グリーン・ツーリズム”のなかでも、最も「鏡効果（他者との交流を通じてみた日常生活に潜む価値への気づき等）」の高い取り組みである。学生を参加者とする域学連携型の農村ワーキングホリデーは、次世代の若者たちが、農業・農村が直面する地域課題を当事者意識をもって理解する機会を提供するとともに、多世代間の交流による

「鏡効果」により地域のコミュニティが活性化するなどの変化が期待されている。

2. 活動の内容

岩手プログラムでは、①「農村ワーキングホリデー実施」（9 月中旬 3 泊 4 日型と 4 泊 5 日型に分けて実施、学生 32 名参加／岩手県立大学ほか他大学学生 14 名と合同で実施）、②「岩手県農家の和歌山研修受入」（翌年 1 月下旬 1 泊 2 日、受入農家 12 名が大学を訪問し参加学生と交流）、③「振り返りセミナー開催」（3 月に現地開催、教員と学生･卒業生が参加予定）のサイクルでの取り組みが定着している。

和歌山プログラムは台風被害と重なり限定的な実施となったが、①「観光ぶどう農園ジベレリン処理･摘粒作業（6 月上旬）」（農家民泊型かつらぎ町、学生 12 名参加）、②「道普請参加（日帰り）」（12 月初旬かつらぎ町、学生 4 名参加）が実施済。

3. 活動を通じて

各地でのプログラム毎に、①受入農家・参加学生を対象とした事前学習会の開催、②受入農家・参加学生のプロフィールシート作成、③実施中の業務報告と実施後のワークショップ開催、④参加学生のリアクションペーパーと受入農家の評価シートを編集した「記録集」を作成（各取組毎に作成）。これにより、地域（受入農家や地元行政）が取り組みの経験を暗黙知に留まらせることなく“可視化“し、持続的な取り組みに発展させることが可能となる。

4. 成果物など

これまでの実践をもとに「農村ワーキングホリデーへのいざない（改訂版）」を編集・発行し、プログラムの普及・啓発に大きく貢献した。